



おばあさん仮説



Michi recommends 響く本『人間になれない子どもたち』



清川輝基
(きよかわてるき)

1942年、生まれ。
1964年、東京大学教育学部教育行政学科卒業。
同年、NHKに入局。社会報道番組ディレクターとして、「新日本紀行」「ニュースセンター9時」などを担当。海外取材番組「教育の時代」、NHK特集「警告!子どものからだは触れている」「何が子どもを死に追いやるのか」など教育問題、子どもをテーマに取り上げた特集番組も多く手がけた。
1989年、報道局首都圏部長。
1992年、報道局次長。
1994年、長野放送局長(長野オリンピック放送実施本部兼務)。
1966年、「福岡子ども劇場」創立。
1999年、「チャイルドライン支援センター」設立などの活動も続けてきた。
現在、NHK放送文化研究所専門委員(「メディアと子どもプロジェクト」メンバー)、「子ども劇場全国センター」代表理事、「チャイルドライン支援センター」代表理事、「子ども白書」編集委員。

昨年(2007年)の夏休みを利用してニュージーランドで実施した「孫と留学」は、フジTVの同行取材や毎日新聞の記事の影響もあり、すでに申込者や問い合わせのメールやファクスが入るようになった。これは日本の少子高齢化と核家族をコンセプトにした企画だが、4年前にイギリスで実施した時の祖父母二組に、他のお孫さんと南半球での実践にも参加いただいた。

地球の温暖化現象で熱帯夜が繰り返されているが、留学先は季節が反対で時差も少ないニュージーランドの北島。親というワン・ジェネレーションを外した祖父母との留学は、予想以上の効果があったようだが、手前味噌になるといけないので、この特集号で確認いただきたい。

北半球と南半球での実践に自信を持ち、青梅市のある財団に提携校のえり子 Mclean 校長と、2回にわたり資料と生声で説明を重ねた結果、同財団の理事長さんの結論が早々と出たの

子どもの運動能力なども二十数年来、低下の一途をたどっている。中学生の「勉強嫌」が67%など学習意欲の低下も著しい。といった、日本の子どもたちのからだや心に何が起きていっているのか、そしてそれは何が原因なのか。

私は、子どもの問題に向き合うには、次の二つの視点が重要だと考えている。

第一はこの四十五十年の子どものたちからだや心の変化をできる限り実証的・科学的にとらえて、その原因と背景をさぐるという視点である。

政府の教育改革国民会議の論議にはこうした視点がまったく見られなかった。都道府県教育委員会をはじめとする子どもや教育を担当する行政当局にもこうした意識は希薄である。なかには、文部省が九六四年昭和三十三年から全国的に実施してきた体力・運動能力調査のデータの保管場所さえ定かでないという県教委もあるのだ。子どもたちの何が変わったかについて、科学的な検証もいままに打ち出される子ども施策は、各種審議会委員や行政当局の主観的思い込みや思いつきの域を出ないものにならざるを得ないのは当然であろう。そして、そんな代物が「子どもの危機」を解決する有効性など持つはずがない。

この半世紀の間に、日本の子どもたちにどんな変化が起きているのか、そして、子どもたちのからだや心を育む発達環境の何がどう変わったのかをわかりやすく解き明かすことに意を用いたつもりである。大人たちが「子どもの危機」に立ち向かい、「子どもにとっての最善の利益」(一九八九年に国連総会で採択された「子どもの権利条約」)のなかにある言葉)を保障していくうえで、このことが絶対に必要な作業だと思っからである。

第二のポイントは子どもと親の問題を考える場合の多角的で総合的な視点の重要性である。子どもはからだと心が同時並行的に発達して「人間」になっていく。したがって、からだの発達の遅れや歪みと心・人格発達の遅れや歪みをもたらす条件や環境を個別にさぐるのではなく、多角的で総合的な視点で子どもの生育環境を検証して、みることによって「子どもの危機」の原因や背景がくっきり浮かび上がってくるにちがいない。

これまで「子どもの危機」や子育てに関する数多くの本が出版されている。しかし、からだや心の発達を総合的に見つめ、医学、心理学、身体発達、教育、文化環境など多角的な視点で子どもの現状に迫ったものはほとんど見当たらない。

私は、三十五年にわたってテレビ報道に携わり、子ども問題も含めてさまざまな社会現象と向き合ってきた。そのなかで、この本質に迫るには、多角的で、学際的なアプローチの重要性を痛感している。

そうした思いを込めて、現在の日本の子どもたちの状況にできるだけ多様な視点を提示し、各分野の研究結果も紹介しながら「子どもの危機」の実相に迫り、それを克服する手がかりを提供しようとして試みた。

子どもの問題に向き合う視点。

実践的・科学的視点と多角的・総合的視点。

は嬉しい。

まず、財団から参加者を募集する前に、奥様と一緒にお孫さん連れて「孫と留学」を体験する。時期は春休みでも、夏休みが始まる前でも良い。「孫と留学」のコンセプトがよく理解できたので、孫を学校に通わせるより、祖父母と一緒に「孫と留学」に参加する方が教育になることが分った。

1998年、人類学者のクリスティン・ホークスは「おばあさん仮説」を発表した。アフリカ・タンザニアのある採集民族の調査の結果、祖母は子育ての経験と知恵で採集の難しい根茎などの食物を探り、赤ん坊の世話をして母親の子育ての労力を軽減していると言っている。「孫と留学」のコンセプトと重なる。

おばあさんの存在は、人間関係の調和や問題解決にクッション役になり、母親の手助けは間接的に母親の繁殖力を高めることになると言えよう。

MAPLE NEWS

2008年 Vol.60



EAST MEETS WEST: Children from Thames South school, left, welcome their Japanese guests. From right, seated, grandfather Hiroshi Ito with grandsons Daichi and Taiga Sato, and Ren Kanemaru. Back, from right, Takiko Osawa, Keiko Tamura and Shino Kanemaru. Cameraman Kim Seungjin is standing. PICTURE: Iain McGregor

Taste of Kiwi for Japanese

Thames will be in the spotlight in Japan thanks to a visit by a Japanese delegation. Mrs Tamura and grandson Naoki Tamura says there was "a nice experience" for the children.

カナディアン・アカデミー・セタガヤ企画

「孫と留学」ニュージーランド

地元新聞に掲載される

On Thursday morning, the party was greeted at Thames South Primary School with a powhiri. At a briefing beforehand, grandmothers Keiko Tamura and Takiko Osawa quickly practised a Japanese song for kids and adults to perform, complete with hand actions and nervous giggles.

adults take English language classes. In the afternoons, they'll all get together for activities including a visit to a donkey farm, an afternoon at Waitema Beach and a bush walk. Ms Nishibashi said the Kiwi experience would screen on Tokudane, a morning television feature with an estimated 12 million viewers nationwide.

2008年1月20日
毎日新聞に掲載される